

ANNA AND SIMEON

アンナとシメオン

創刊号

ヴォーリス建築  
「シメオン黙想の家」  
再生の軌跡。

アシュラム  
ASHRAM



シメオン黙想の家

住所／滋賀県近江八幡市土田町1191

シメオン黙想の家へのアクセス

《公共交通機関をご利用の場合》

JR琵琶湖線「近江八幡駅」北口、  
バスのりばより 近江鉄道バス 長命寺線 長命寺行  
「小幡上筋バス停」(6区間、5分)より徒歩10分

《お車で越しの場合》

名神高速道路「竜王I.C.」より車で20分

お問い合わせ先

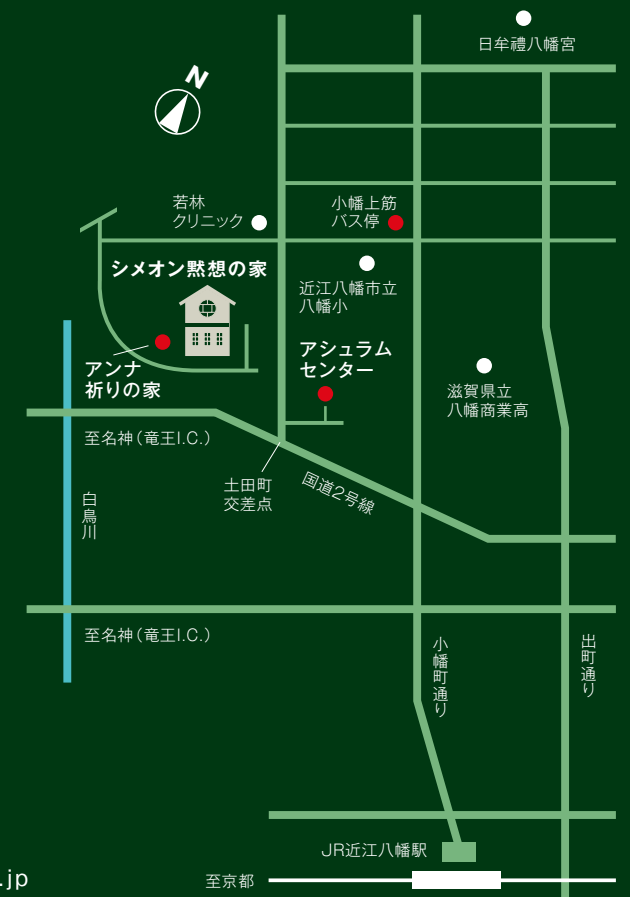
アシュラムセンター

〒523-0894 近江八幡市中村町567-2

TEL.0748-33-4030 FAX.0748-33-8856

メールアドレス contact@ashramcenter.jp

ホームページ <https://www.ashramcenter.jp>



編集後記

新型コロナウイルス感染症の感染拡大により、アシュラムセンターとしても多くの集會が中止になり、全国の友と交わることができなくなりました。しかし、オンラインを活用して今まで以上に多くの友と分かち合い、祈り合うことができた一年でした。そんな中、完成したのが本誌です。初めての試みでしたが、制作陣一同で見応え、読み応えのあるものを作ろうと話合い、素晴らしいものが出来たと思います。キリスト教の枠を超えて、多くの方にヴォーリス建築やラビリンスの魅力、そしてアシュラム運動について伝えられればと願っています。

アンナとシメオン 創刊号

発行日 2021年12月1日  
発行者 アシュラムセンター  
編集長 榎本 恵  
コラム 芹野 与幸(株式会社一粒社ヴォーリス建築事務所)  
武田 光世(公認心理師)  
副編集長 榎本 光太  
編集 榎戸 基、榎戸 真弓  
デザイン 阿久田 孝司(DSIGN COLLECTIVE)  
写真 大里 敏夫(Photohouse OSATO)



# 建物が語り出すものがたり 芹野与幸

建物は人々の生活や  
息遣いが漂ってこそ価値がある

1995年、長野の郷土史家の方との交流で軽井沢に赴いたとき、山形教授とともに軽井沢に残るヴォーリス建築のドリーハウスの前に立った。そこには人の気配もなく、荒廃化し樹木に覆われた建物があった。案内し同行したテレビ局レポーターがマイクを向けてコメントを求めた。私は「もし、今ここにヴォーリスがいたら悲しむだろう」と答えた。

建物は人々の生活や息遣いが漂ってこそ価値がある。今回長く建物を愛され、人生を過ごされた人々の手を離れ、荒廃化しつつあった建物が新たな命を与えられ復活したことを心から慶びたい。

登録文化財とは、文化的な価値を認め、それを顕彰するために登録指定されるものだ。

近江ミSSIONの建築部にあつて、際立って天才的な才能を発揮し、ヴォーリス建築の今日的価値を不動のものにした佐藤久勝が自身の住まいとして設計したのが今回披露される建物である。

この八幡にある近江ミSSION住宅の一つであった旧前田邸(佐藤久勝邸)の改修お披露目の機会に、本日は三人の人物にスポットをあてて、ひとときの建物が語り出す物語に心を向けたと思う。

ヴォーリスを「建築家」という一断面から知る方は多いかもしれない。しかし彼がどのように言われるようになった背景には、知られざる歴史がある。そして、彼には多くの同志がいた。その一人が今回の建物の設計者である佐藤久勝である。

この機会にヴォーリスと同じ時代に、同じような志を持ってインドにわたり、独自の活動を生み出した人物にも目を向けたい。彼の生み出した独自のムーブメントは世界的に広がり、偶然にもそれを継承する団体がこの度近江ミSSIONのヴォーリス建築と接点を持つことになった。その人物がスタンレー・ジョーンズである。二人の共通点



佐藤久勝氏

あるヒンズー教の人々との出会いと交流から、宗教的な対決でなく、彼らから独自の精神修養の方法を学び、今日のアシラム運動を生み出した。

建物に人が住み、その場所を愛し続けることで、そこには建物が語り出す多くの物語が宿り、人々が喜んで集う場となる。

冒頭で触れた軽井沢での突然のインタビューに私は次のようなことを語った。

「もし、ヴォーリスさんが今ここに立ったら残念で寂しがるだろうと思います。その窓が開かれ、家の中から人の笑い声が聞こえるような、そこに人が幸せに暮らしている情景があつてこそ建物はその本領を発揮するとヴォーリスさんは思うでしょうから。」

本文は「旧前田邸(佐藤久勝邸)改修記念講演 建物が語り出すものがたり」と題して、アシラム誌 第627号(2021年2月1日)と第628号(2021年3月1日)に掲載されたものです。



William Merrell Vories



E. Stanley Jones

建築家である前に  
信仰の同志としての信頼関係が  
多くの建築を世に送り出した

「ヴォーリス建築」と人々によって呼ばれる多くの建築作品は、ヴォーリスただ一人の手で生み出したのではなく、多くの優秀なスタッフによって為されたことを確認しておきたい。たとえば映画の世界でも「黒澤明」や「スピルバーグ」なども同様で、多くの優秀なスタッフの手で作品は生まれる。ヴォーリスの意思をしっかりと理解し、人生の同志として技術を超えて共に生きようとした「兄弟」のようなスタッフが近江ミSSIONを支えていた。

建築デザイナーとしての佐藤は、同

時にヴォーリスと同じ信仰を持ち、教会活動や近江ミSSIONの働きの同志であつた。多くの海外の優れた建築デザインを熟知しながらも、その様式に束縛されることなく、自由にそれらを応用するクリエイターであつた。

ヴォーリスは来日前に建築に興味があり、大学もそのコースを選択していたが、図らずも神の不思議な導きで海外宣教へと転向したことは知られて

る。ヴォーリスがこの決心をする出会いをしたのは1902年のことであつた。ちょうどその一年前の1901年に同じような体験のもとに海外宣教に転向した青年がいた。彼はヴォーリスより4歳若く、法律を学んでいた。そして

米国メソジスト監督教会の海外宣教に身を投じた。ヴォーリスが日本に渡つたのが1905年、派遣された商業学校の職を辞し、近江ミSSIONを立ち上げた1907年、それはちょうど先の

青年がインドに足を踏み入れた年でもある。彼の名はスタンレー・ジョーンズという。ヴォーリスは仏教圏の只中にあつて、彼はヒンズー教の最も盛んな

インドで活動を開始することになる。ヴォーリスの建築が全国各地に存在していることは知られているが、なぜ八幡のヴォーリスが日本全国に展開して

そこには建物が語り出す  
多くの物語が宿り、  
人々が喜んで集う場となる

ヴォーリスは近江に「神の国」を建設すべく、実験的な宣教活動の足跡を遺した。単なる布教だけでなく、具体的に人々の生活の中で為すべき社会改革に挑戦し続けた。佐藤久勝は建築デザインの仕事を通して多くの施主の信頼を得、ヴォーリスの思いを建築デザインを通して実現し貢献した。スタンレー・ジョーンズは欧米のキリスト教の伝統にこだわらず、インドに古くから



Tomoyuki Serino

芹野 与幸

株式会社一粒社ヴォーリス建築事務所 非常勤顧問  
公益財団法人近江兄弟社 嘱託研究員

写真はシメオン黙想の家にて(写真右)



写真で見る

|   |   |
|---|---|
| 黙 | シ |
| 想 | メ |
| の | オ |
| 家 | ン |

## 命の息を吹き入れられた。

みなさんの尊い献金によって、シメオン黙想の家に主の息が吹き込まれ、福音を伝える器として、こんなに素敵になりました。ここで共に祈りを合わせ主の御声に耳を傾けてみませんか。



2階には3つの部屋。  
木々の鳥達が間近に。

小さくて、黙想にピッタリの部屋。

玄関とびらの小窓から。

今も光り続けるステンドグラス。  
推しは夕陽の頃！デザインにも注目。

琉球畳仕様、和のツインルーム。  
目の前はテラスとラビリンス！

玄関隣の応接間。  
幸いなひとときをどうぞ。



# アシュラムセンターのラビリンス

武田 光世

製作／宮本 肇  
監修／武田 光世



唯一の「正しい歩き方」は無く、場を共にする人への配慮がある限り、自分なりに歩くことができます。体験は人によって異なり、同じ人でも歩く度に異なります。ラビリンスを歩く黙想会を開いている聖霊会のシスターは「ラビリンスを歩いて得た体験は神様からのお恵みです」と言われます。ラビリンスの空間は大切なものと向き合う場になり得るのです。



Mitsuyo Takeda

武田 光世

公認心理師。日本カウンセリング学会認定カウンセラー。日本スピリチュアルケア学会会員。『聖なる道を歩く』訳者。『ラビリンスウォーク: 歩きながらの祈りと黙想』（『礼拝と音楽169号』）筆者。ヴェリディタス認定ラビリンスファシリテータ。ガードナーと共に、1997年にグレイス大聖堂でラビリンスを歩き、2009年にシャルトルでラビリンス・ファシリテータ研修を受講。ラビリンスウォークの実践を手伝う。

写真はコロラド州クレストンにて（写真左）  
Nada Carmelite Hermitage



外 周の円は世界の、屈曲した道は「巡礼の道」「人生の道」の象徴と言えます。祈りと黙想のためにラビリンスを歩く「ラビリンスウォーク」は、1991年に米国のグレイス大聖堂司祭ローレン・アートレスが教会と地域に紹介して以来、世界各地に広まりました。信仰の異同や有無を問わず幼児から高齢者まで歩けることから、寺院・病院・学校・公園などにも導入されています。手指で道をたどる「フィンガーラビリンス」は病床にある人などに使われています。



ラ ビリンスは迷路ではありません。道なりに歩いて行くとおのずと中心に至ります。同じ道に戻り、入口が出口になります。歩く過程は「三つのR」で表されます。中心に向かいながら「解き放ち（リリース）」、中心で歩を止め「受け取り（レシーブ）」、外に「戻って来る（リターン）」。歩く前後の「内省（リフレクション）」は体験を深める役に立ちます。





静岡英和女学院旧宣教師館

住所 静岡県静岡市葵区西草深町

ホームページ <https://www.miss-cunningham.com/>

メールアドレス enoto@miss-cunningham.com

電話 054-277-9090

登録有形文化財となった。太平洋戦争で一旦カナダに強制送還された宣教師たちが来日し、滞在するために1950年に竣工。16年間宣教師館として使われた後、校長住宅、カナダ人英語教師の宿舎、短大の寮として活用された。

現在は、静岡英和女学院の卒業生夫妻でアシラムセンターの役員である榎戸基兄・真弓姉の住宅である。建物の維持保存をしながら、「宣教師館として活用されていた頃の文化も大切にしたい」との思いで、様々な活動をしている。恵牧師との不思議な出会いで静岡聖書教室は6年前からこの宣教師館で行われるようになった。「月曜日の放課後はここでバイブルクラスが持たれていたそうです」と真弓姉。アシラムセンターの静岡聖書教室は毎月最終の月曜日。これをヴォーリスマジックと言うのだそう。

6年前は6〜7名の参加者だった静岡聖書教室は、現在は、近隣の7教会から、また初心者の方も一緒にあって、午前午後の2回行っている。「そろそろ3クラスも考えなくては」と榎本恵牧師。コロナ禍においてもzoomで開催し、聖書教室は休むことなく続けられている。



静岡英和女学院旧宣教師館

《ヴォーリス建築》

ウイリアム・メレル・ヴォーリスが手がけた1,500棟余りの建築は、教会、個人宅、別荘、学校、病院、デパートと多岐にわたる。ヴォーリス建築事務所は軽井沢に夏のオフィスを構え、夏休みの避暑に全国から集まる宣教師たちと交流を持つことで、ミッションスクールの校舎や寄宿舎を建てるに至ったそう。

明治時代、静岡英和女学院、東洋英和女学院、山梨英和女学院の三つの姉妹校はいずれもヴォーリスによって校舎や寄宿舎が建てられた。しかし残念ながら戦争や大火、老朽化により現存するものは少ない。現存するもののひとつが、民間所有の静岡英和女学院旧宣教師館である。戦後の希少なヴォーリス建築として確認され、2014年に国

アシラムセンターとゆかりのある場所を「たびんちゅ(旅人)牧師」こと榎本恵主幹牧師が訪ねます。

恵牧師は、祈りと聖霊の働きにより、今日も全国に御言葉を伝え続けています。



## ● 修 復

皆様の尊い献金により2020年4月に旧佐藤久勝邸（改シメオン黙想の家）を購入させていただき、7月より修復作業が開始されました。天井が剥がれ落ちた箇所や穴の空いた箇所などがあり空き家のまま放置された状態でしたが、当時のデザインを残しつつ、故佐藤久勝氏の思いとアシュラム運動の信仰が合わさり、新しく生まれ変わりました。

敷地の半分以上が庭であり、その整備も修復作業



## ● ラビリンス

日本に数カ所しかないラビリンスがシメオン黙想の家に新たに誕生しました。本誌の特集ページの著者である武田氏の監修の元、約半年かけて完成しました。天候や気温に左右されながらも手作業で1万個以上の石を並べて形作りました。1階の和洋室から一望できるため、見ながら、歩きながら黙想することができます。宿泊した際は、ぜひ一度ご体験ください。



と同時に行われ、門から玄関までのアプローチやテラスなども製作しました。また、桜や紅葉、椿など多くの木々が植えられており、当時と同じように四季を楽しむことができるようになりました。

2020年12月には、近隣の方、ヴォーリス建築に関心のある方をお招きし、内覧会を催しました。コロナ禍ではありましたが、約200名の方にご参加いただき、無事終えることができました。

## ● 施設紹介

シメオン黙想の家は、1階に和洋室（ダブル）、応接間、キッチン、浴室等があり、2階に洋室（シングル）が3部屋あります。各所にヴォーリス建築の特徴や故佐藤氏特有のデザインが見られます。特に応接間の壁にはめられているステンドグラスには、玄関に時計を運び込む様子が描かれています。90年前に建築されたとは思えない近代的な洋館をどうぞお楽しみください。



## ● 活用状況

2021年から本格的な活用が始まり、隣接するアンナ祈りの家と共に修道場アシュラム（月1回、2泊3日）の会場として用いられています。また、都会の喧騒から離れ、静まりたいという方の黙想の場としてもご利用いただいています。

現在は、アシュラムの参加者、関係者の利用に限っていましたが、今後シメオン黙想の家の保存にご協力、ご賛同いただける方の見学や宿泊も可能にしていきます。

## 感謝のメッセージ

主の平和

「アンナとシメオン」創刊号を、お読みくださりありがとうございます。

昨年、神様の不思議な導きにより、この場所をお譲りいただけることとなり、アシュラムセンターでは、その購入を決意し、皆様方に尊い献金をお願いして参りました。僅か、一年余の間に、多額の献金をお献げいただきましたこと、まず心より感謝申し上げます。

さて「アンナ」、「シメオン」とは、新約聖書の中に出てきます、幼子イエスを初めてその手に抱いた二人の老人です。彼らは、その生涯を、神の約束を信じ切って生き、幼児イエスに出会ったのでした。その姿は、年老いてこそ、豊かであり、美しく、尊いのです。

私たちアシュラムセンターでは、この二人の名前を戴き、それぞれの建物を「アンナ祈りの家」、「シメオン黙想の家」として、宿泊研修場として用いています。約500坪の敷地に、2棟の古い建物があります。そのうちの一つは、立派な庭園を持つ平家建ての日本家屋、そしてもう一つは、90年前に建てられた、ヴォーリス建築の洋館です。また、その庭には、黙想と祈りのための道ラビリンスが、作られています。確かに、それらは、不動産的価値からすれば、古い中古物件ではありますが、私たちは、その古さの中に新たな価値を見出し、それを守り伝えて行こうと決意しています。2000年前の出来事が、時を超え、私たちの心のうちに、風となって吹き渡ってくるように、と。

ゆくゆくは、この場所をアシュラムセンターの中核施設「ちいろば共同体（仮称）」として、「音楽を自由に奏でることのできる礼拝堂や修道生活者が住むためのレジデンス棟なども作りたい」と夢を広げています。

もちろん、それを、私たちだけで準備し、維持管理していくことには限界があります。財的にも、人的にも小さな私たちの力だけではどうすることもできません。私たちは、この「アンナとシメオン」誌を通して、そんな私たちの想いを共有していただける方を求めています。

まだ見ぬあなたとの出会いを、思い浮かべているのです。同じ風に吹かれ、同じ志を抱き、同じ夢を見る。どうか、この「アンナとシメオン」の会員となってください。そして、ともに古いものは決して古いままでは終わらない、新しい命を与えられ、見事に再生されていく、その目撃者となってください。皆様との、新しい出会いを信じ、祈っております。

アシュラムセンター主幹牧師 榎本 恵

## 支 援 の お 願 い

私たちは、シメオン黙想の家、アンナ祈りの家、これらを拠点として誰もが集える共同体を形成し、ヴォーリス建築の保存活用を進めていきます。そのためには、建物の維持管理、購入費の返済、また今後の活動に多くの費用を必要とします。

上述の共同体構想に共鳴し、積極的にご協力、ご支援、ご奉仕いただける方を会員という形で募集します。金銭的なご支援だけでなく、建物や敷

地の清掃などのご奉仕、アシュラム集会へのご参加をいただけると幸いです。ご協力いただいた方には、毎年本誌をお送りし、近況報告やヴォーリス建築などについてお伝えしていきます。また現在、シメオン黙想の家はアシュラム集会等の利用に限定していますが、今後見学や宿泊を可能にしていき、ヴォーリス建築の魅力を伝えていきたいと思っています。